

標準カバルド語における自他動詞対の記述

竹内晶

shotakeuchiattuo@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

キーワード：北西コーカサス語族 カバルド語 自他交替 言語類型論

要旨

本稿では標準カバルド語における Haspelmath (1993) の自他動詞対を記述する。具体的には、標準カバルド語では有方向性派生が多く、有方向性派生である使役派生と逆使役派生の分布が通言語的なものと一致すること、また派生形式の選択に関してアヴァル語を除く北東コーカサス語族の言語とアゼルバイジャン語に類似していることを示す。これらを以て以下の 3 点を主張する。①標準カバルド語の自他動詞対のデータは Haspelmath (1993) の「自他交替には意味による類像性が存在する」という主張を支持する。②自他交替の派生形式の選択には、形態論的豊かさも関与する可能性がある。③標準カバルド語の自他動詞対のデータは Haspelmath (1993) の「自他交替には系統的關係よりも地理的關係の影響が出やすい」という示唆を支持する。

1. はじめに

本調査の目的¹は、標準カバルド語において Haspelmath (1993) に挙げられる 31 対の自他動詞対を記述し、その派生形式にどのような傾向が見られるかを分析することである。また、得られたデータを国立国語研究所 (2014) の『使役交替言語地図』 (The World Atlas of Transitivity Pairs、以下 WATP) のデータと対照し、標準カバルド語を世界の言語の自他交替類型の中に位置付けることも試みる。

自他動詞対の交替について、Haspelmath (1993) は通言語的な傾向が存在することを指摘している。この主張は、特に状態変化を表現するような動詞について、自他交替の形式と意味の間に一定の類像性が存在するというものである。同論文では自他交替に現れる形式を以下の 5 つに分類している。

- 使役派生：自動詞から他動詞が派生される。有方向性派生である
- 逆使役派生：他動詞から自動詞が派生される。有方向性派生である。
- 両極派生：共通の語幹から自動詞と他動詞のそれぞれが派生される。非方向性派生である。
- 補充：自動詞と他動詞で異なる語根が用いられる。非方向性派生である。

¹ 本研究は国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」による成果の一部に基づいている。

➤ 自他同形:自動詞と他動詞が同形である。

これらの派生形式は、認知的観点からそれぞれの動詞が表現する状態変化が自発的に起こりやすいか、それとも動作主のような何らかの外的な要因を必要とするかという、意味的な指向性が類像的に関連しているとされた (Haspelmath 1993)。ある自他動詞対に関して通言語的に使役派生が優勢であるという傾向と、その自他動詞対の表す状態変化が認知の上で典型的には自発的に起こりやすく、自動詞が無標であることが相関しており、反対に逆使役派生が好まれるのであれば、それは典型的に外的要因があつて起こりやすいという認知と相関しているという主張である。例えば‘melt’を意味する自他動詞対について、後述する WATP にデータの登録されている言語の内の 68.1%の言語は使役派生の派生形式をとるという傾向と、‘melt’の表す状態変化が認知的に自発的に起こりやすい事象であるということが相関しているということである。

この理論的枠組みの下で Haspelmath (1993) は 31 対の状態変化を表す自他動詞対を用いて、21 の言語においてその 31 対の自他交替の派生形式がどのようなものであるかを辞書調査した。この自他動詞対のセットは‘cut’のように「鋭い道具を用いて」のような外的な要因が含意されたり、‘decapitate’のように特殊な意味を含意するものは除いた、辞書で調べやすい動詞対によって構成された。結果として、個別言語ごとに差異はあるものの、確かにそれぞれの動詞対に関して通言語的に交替の派生形式はランダムではなく、一定の類像的な傾向は存在するということが示された。

加えて、Haspelmath (1993) は英語が特に自他同形を好むこと (WATP によれば 31 対の内 80.6%が自他同形である) について、形態論的な乏しさと関連している可能性に触れており、この可能性を検証するにはより多くの孤立語がサンプルとして必要であると述べている。

また同論文では、使役派生と逆使役派生のどちらをより多く用いるかという傾向について、ヨーロッパの言語は逆使役派生を好み、それ以外は使役派生を好むという観察から、系統的影響よりも地理的に近接する言語どうしでは類似するような影響が優勢であると示唆された。これは例えばギリシャ語がヒンディー語やアルメニア語の方に系統的にはスラヴ語派やゲルマン語派よりも近いにも拘らず、交替としてはロシア語やドイツ語のように逆使役派生を強く好むという結果によるものである。

WATP は Haspelmath (1993) と同様の枠組みにおいて世界の言語の自他動詞対のデータを収集し、自他交替の類型と類像性を検証するための国立国語研究所によるデータベースである。31 対の自他動詞対を提示するにあたって、WATP では Haspelmath (1993: 104) に提示された順番同様に、番号の小さいものほど通言語的に使役派生になる傾向があり、番号が大きいほど逆使役派生になる傾向があるというように並べられている (具体的には 4.2 節の表 2 に挙げられている)。2020 年 7 月 1 日現在はユーラシア大陸周辺の言語のみに留まるものの、82 の言語のデータが集まっている。これらのデータと対照することで、より通言語的な観点から分析が可能になる。

本研究はこれらの先行研究の枠組みにおいて標準カバルド語の自他交替を記述するものであ

る。コーカサス周辺の諸言語は後述のいくつかの言語が WATP に挙げられているが、北西コーカサス語族の言語は未だ挙げられていない。この点で標準カバルド語の自他交替の記述は広く類型的な貢献になりうる。さらに、カバルド語の存在するコーカサス周辺は非常に多くの言語が密集する地域であり、カバルド語の言語を記述することは同時にコーカサスの他の言語の研究においても地理的な対照研究の可能性が広がるという利点がある。

本稿は標準カバルド語の記述から得られたデータと WATP に挙がっているデータとを対照し、Haspelmath (1993) において示唆された上記の類型的観点、形態論的観点、地理的観点という3つの自他交替と相関する事項に関して検証する。そして、最初に交替に関する通言語的な類像性が、カバルド語においても見られることを確認する。次に派生形式の選択と形態論的な豊かさが相関しているという仮説を提示する。最後に個別言語の派生形式の選択傾向には少なくとも系統的関係よりも地理的關係の方が影響が大きいことを示唆する結果を提示する。

本稿は以下のような構成である。第2章ではカバルド語の地理的、文法的概要を示す。第3章では調査方法について述べる。第4章ではカバルド語の自他交替に見られる派生形式と調査結果の全容を提示し、個別的な分析が必要なものを説明する。第5章ではカバルド語の自他交替の類型的な傾向と、形態論的豊かさに関する仮説を述べる。第6章ではコーカサス周辺の言語について WATP のデータを参照して、カバルド語を地理的に観察する。第7章では結論を示す。

2. カバルド語について

2.1. カバルド語の所在

カバルド語 (Kabardian, ISO639-3: kbd) は北西コーカサス語族チェルケス語派 (Northwest Caucasian Family Circassian Branch) に属する言語である。主にロシア連邦北カフカース連邦管区のカバルダ・バルカル共和国、カラチャイ・チェルケス共和国で話される他、トルコ、シリアなど中東にも話者がいる。Matasović (2009) によれば北コーカサスにおける話者数は 40 万人以上とされ、それ以外の地域ではカバルド人は 23 万人ほどとされるが、後者の内の正確なカバルド語話者数は不明である。現在北コーカサスにおけるカバルド語の方言はバクサン方言 (Baksan dialect)、ベスレネイ方言 (Besleney dialect)、モズドク方言 (Mozdok dialect)、クバン方言 (Kuban dialect) の四つである。標準カバルド語はバクサン方言が基礎となっている。

コーカサスという狭い地域には語族の異なる言語が密集している。図 1 は Matasović (2009: 109) や Lander and Michael (2011: 126) による言語分布図を参考に筆者が作成したコーカサスの言語分布図である。可読性の都合により図 1 は簡易的な略図であり、実際は主にアヴァル語やレズギ語などの周辺の空白に見える地帯に遥かに多くの言語が密に分布していることに注意されたい。

Nikolaev and Starostin (1994) や Lander and Michael (2011) によれば北西コーカサス語族と北東コーカサス語族に関しては系統関係があるのではないかとの指摘もある一方で、カルトヴェリ語族 (南コーカサス語族とすることもある) やチュルク諸語と北コーカサス諸語の系統関係は否定

的である。このように密集している地帯において、系統的に異なる言語に共通するような特徴が観察される場合、自他交替の類型論においては系統的な影響よりも地理的な影響が色濃く表れるという仮説を支持する一つの要因たりうる。

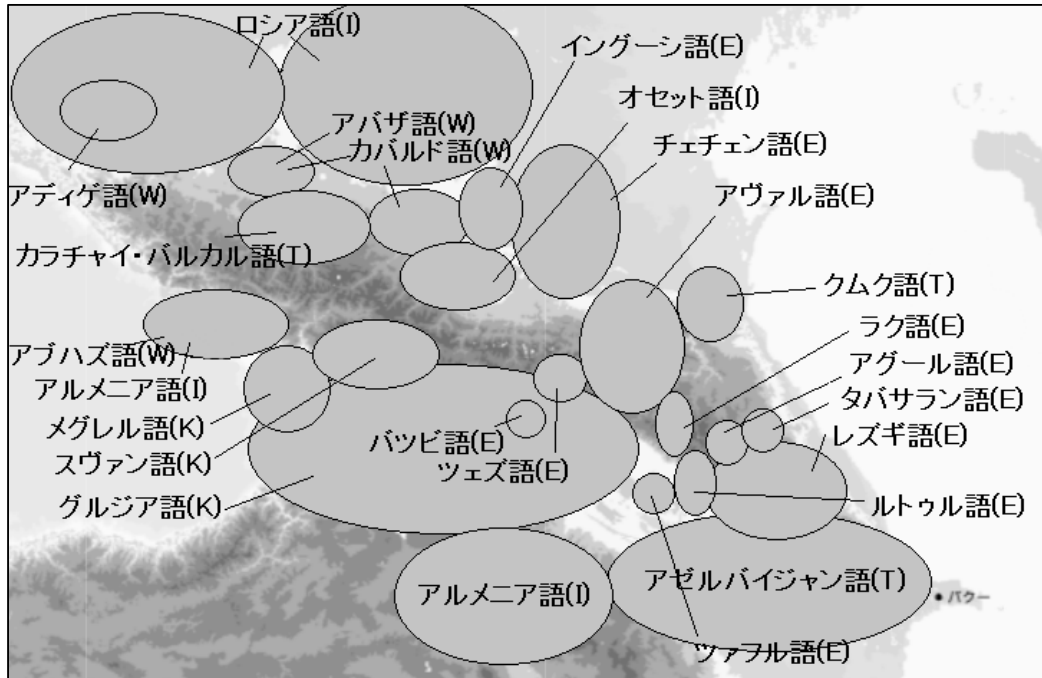


図 1. コーカサスにおける言語分布: 括弧内のアルファベットは系統である。E は北東コーカサス語族、I はインド・ヨーロッパ語族、K はカルトヴェリ語族、T はテュルク諸語、W は北西コーカサス語族を示す。(地理院地図を基に筆者が作成した)

2.2. カバルド語の文法的側面の概略

カバルド語は他の北西コーカサス語族に属する言語同様に能格型の複統合的な主要部標示言語であり、基本語順は SOV である。自動詞の主語と他動詞の目的語は主格、他動詞の主語は能格で標示され、間接目的語に関しては能格もしくは他の斜格によって標示される。また、プロドロップ言語である。

名詞形態論は数、格、定性が標示される比較的単純なものであるのに対して、動詞形態論は複雑である。動詞は語幹に人称、方向、再帰、相互、使役などの接頭辞、時制、法などの接尾辞を特定の順序で接続して用いられる。人称接頭辞は人称、数、格を同時に標示する。以下に挙げる例文 (1) と (2) はいずれも Matasović (2009) からの引用である。²

² 本稿では、ラテン文字転写の音表記は Colarusso (1992) や Matasović (2009) 等の文法書を参考にしつつ IPA 表記とした。これはキリル文字表記されているカバルド語に、現状は研究者間において統一的な転写法が存在しないためであり、また、文献によっては kʷ を kʷʰ と記すなど一部が他の研究者の参照にあたって不親切な表記を用いていることを鑑みたものである。本稿において特に重要である自他動詞対のデータに関してはラテン文字転写のみでなく、本稿が検証される場合を考慮して、追跡可能なキリル文字表記も併記した。

(1) wə-s-x^{wə}-hə-nwə-ε.

2SG.NOM-1SG.ERG-POT-carry-FUT-AF

‘I will be able to carry you.’

Matasović (2009: 49) より引用。

(2) a:bə sa ε’a:la-xa-m sə-εə-ya:-x^{wə}az-a:-ε.

there I.NOM boy-PL-ERG.DEF 1SG.NOM-DIR-3PL.ERG-meet-PRET-AF

‘I met the boys there.’

Matasović (2009: 90) より引用。

例文 (1) は主語が能格であり目的語が主格である、典型的な能格的二項述語の例である。また典型的なプロドロップの例でもある。代名詞を明示するのならば、一人称単数能格代名詞、二人称単数主格代名詞、動詞の SOV 順が最も中立的である。動詞接頭辞の/x^{wə}-/は可能の接頭辞であり、主語にとって動詞の表す事象が遂行可能であることを示している。動詞接尾辞の内、語根に近いものは未来時制を示す接尾辞である。また、動詞の末尾に接続している/-ε/は Colarusso (1992: 125) によれば「単純肯定平叙法」を示す接尾辞であり、この接尾辞の不在は非現実や極性疑問を表す。

例文 (2) は伝統的に二項動詞の自動詞的用法と呼ばれるものである。二項動詞/x^{wə}aza-n/‘meet’の主語は一人称単数代名詞の主格を取っており、目的語は名詞/ε’a:la/‘boy’の複数能格である。名詞の数は語幹のみを用いて/ε’a:la-m/としても単数と複数の両方を意味することができるが、ここでは複数接尾辞/-xa/により明示されている。名詞の能格接尾辞は同時に定性も標示している。過去時制は例文 (1) 同様動詞接尾辞で表される。

特に本稿では、動詞形態論の中でも接頭辞が重要な役割を果たしている。なぜならば、今回調査した範囲においては、形態的な動詞の派生は接頭辞によってのみ引き起こされているからである。調査で得られた具体的な派生形式については 4.1 節で述べる。

3. 調査・分析手法

本研究では、調査手法としては、Haspelmath (1993) にて用いられた 31 対の動詞対について、ロシア語カバルド語辞書である Shogentsukov (1955) と Bichoev (2013) を用いて調査した。これらはいずれもロシア語、カバルド語の教育現場での使用に耐えうるよう編纂された、標準カバルド語を対象とした辞書である。辞書を引く際に用いたロシア語の単語については、英露辞書である Howlett (1996) により Haspelmath (1993) で提示された英単語から露訳しつつ、WATP にて提示されているハスペルマート (2014) によるロシア語の動詞対のデータも参考にした。また、得られた標準カバルド語の単語が Haspelmath (1993) において意図されたところの意味であるか、カバルド語ロシア語辞書の Bichoev (2008) により確認した。

2冊の異なる辞書を調査に用いたが、原則として新しい辞書である Bichoev (2013) のデータを採用した。しかし、Bichoev (2013) に該当するロシア語の項目が無い場合は、Bichoev (2008) に

よるロシア語訳を確認した上で Shogentsukov (1955) を用いて補った。

カバルド語の語根の基本的なものは単音節であるから、カバルド語に同語根由来と考えられる複数の単語候補が挙がった場合は、より音節構造的に簡単なものを採用した。これにより意図しない冗長な派生を採用してしまうことを回避し、カバルド語のより基本的な派生方向を特定した。複数の同等に適切らしい動詞対の候補が生じた場合は両方採用した。

分析では Haspelmath (1993) の派生形式に関する枠組みを採用し、得られた自他動詞対が先述の5分類のどれに属するのか決定した上で、全体の内のそれぞれの割合などを算出した。

4. 調査結果

本章では調査結果ならびに個別的な追加分析について述べる。まず4.1節で先んじてカバルド語に見られる交替の派生形式を示す。4.2節では調査結果の全容とタイプ割合などを提示し、4.3節では一部の有方向性、非方向性の動詞対に関して今回行った分析が妥当であるかを論じる。

4.1. カバルド語における自他交替の派生形式

今回の調査結果において、自他交替に用いられる派生形式は次の通りに観察された。使役派生に用いられる形態素は使役接頭辞/ka-/のみである。逆使役派生には3通りあり、再帰接頭辞/za-/、方向接頭辞/jə-/、迂言的なものである。再帰接頭辞/za-/は異形態として/z-/と/zə-/を持つ。両極派生は接頭辞による形態的なものと、形容詞と動詞による迂言的なものがある。自他同形と補充も少ないながら観察された。

表1に各タイプの具体例を挙げる。逆使役派生、両極派生は形式的に分類した。両極派生の例(E1)に関しては4.3.2節にて再度取り上げる。なお、‘>’は派生を示す記号である。

表 1. 各タイプの形式的な分類

派生タイプ	派生タイプごとの分類	例
使役派生	使役接頭辞/ka-/による派生	1 番‘boil’ 使役接頭辞/ka-/ + 自動詞/va-n/ > 他動詞/ka-va-n/
逆使役派生	(A1) 再帰接頭辞/za-/による派生	21 番‘rise/raise’ 再帰接頭辞/za-/ + 他動詞/?atə-n/ > 自動詞/zə-?atə-n/
	(A2) 方向接頭辞/jə-/による派生	15 番‘finish’ 方向接頭辞/jə-/ + 他動詞/wəxə-n/ > 自動詞/jə-wəxə-n/
	(A3) 動詞過去形と動詞 ‘become’/χwə-n/による迂言 的派生	26 番‘gather’ 他動詞語幹/zax ^w ahasə/ + 過去接尾辞/-a:/ + 動詞 ‘become’/χwə-n/ > 自動詞/zax ^w ahas-a: χwə-n/
両極派生	(E1)	6 番‘sink’ 語幹/ε [’] a-lafa-n/ + Bipersonal 接頭辞/ja-/ + 使役接頭

	接頭辞による形態的派生 ³	辞/ka-/ > 他動詞/ε'-ja-ka-lafa-n/ 語幹/ε'a-lafa-n/ + 方向接頭辞/jə-/ > 自動詞/ε'-jə-lafa-n/
	(E2) 形容詞と動詞による迂言的派生	14 番'fill' 形容詞/jəz-Ø/'full' + 動詞/ε'ə-n/'do' > 他動詞/jəz-Ø ε'ə-n/ 形容詞/jəz-Ø/'full' + 動詞/χwə-n/'become' > 自動詞/jəz-Ø χwə-n/
補充	自動詞と他動詞で異なる語根が用いられる	31 番'die/kill' 他動詞/wək'ə-n/ vs. 自動詞/t'a-n/
自他同形	自動詞と他動詞が同形	24 番'connect' 自動詞、他動詞共に/zapəε'a-n/

方向接頭辞は動詞の表す動作が行われる方向を示しており、他の言語では例えばドイツ語の/her/'こちらへ'と/hin/'向こうへ'などにも見られる。/jə-/はBichoev(2008)ではロシア語の場所、範囲を示す前置詞/в/にあたとされており、'(静的に)あるもの、状態の中で/中に'や'(動的に)あるもの、状態の中へ'を意味する接頭辞である。ただし、Colarusso (1992) や Matasović (2009) が触れているように、カバルド語の方向接頭辞/q'a-'こちらへ'は方向接頭辞として用いられるのみならず、動詞のパラダイムにおいて使用が義務的な場合がある。この類推において、接頭辞/jə-/の意味が希薄化し、逆使役派生の派生接頭辞として運用されているという可能性も考えられる。

逆使役派生の派生形式が 3 種あるのに対し、使役派生の派生形式が使役接頭辞/ka-/のみであることについては、Matasović (2008: 62) や Matasović (2009: 35) において指摘されるカバルド語の非派生他動詞の少なさが起因しているだろう。カバルド語においては自動詞が基本であるので、自動詞から経済的かつ生産的に他動詞を派生するにあたって、動作主の項を増やす使役接頭辞が頻繁に用いられる。他方で逆使役派生の派生形式に幅があるのは、既に自動詞から派生している他動詞に対応する自動詞で、かつ派生前の自動詞ではないものを用いるという特定の意味的な需要が生じたときに、その派生元となる他動詞の意味に応じて派生形式が選択されるのではないかと推測される。後述のように逆使役派生と使役派生の数は大きく異なる訳ではないものの、比が 1 以下であることも、カバルド語が自動詞を基本とすることをやや支持する。

上記の派生形式並びに他の接頭辞が複数共起する例もある。Matasović (2009) の分析に則れば、一般に接頭辞は方向接頭辞、再帰接頭辞、使役接頭辞の順序で接続する。

以上がカバルド語における派生形式の簡潔な説明である。

³ 今回の調査では現れなかったが、純粋に使役接頭辞と/ka-/と再帰接頭辞/za-/あるいは方向接頭辞/jə-/のみを用いた両極派生の交替も存在することが予測される。実際この仮説を支持する例として、12 番'bum'の棄却された候補がある。12 番'bum'には/jə-sə-n/という自動詞が候補として挙げられたが、/sə-n/の方が形態上より簡潔な事、また/sə-n/は特別に様態などを指定しない一方で/jə-sə-n/には'太陽による熱によって'という意味合いが含意されるということから採用しなかった。

4.2. データの全容

今回の調査結果は以下の表 2 の通りである。各データのカッコ内はキリル文字表記、カッコ外は筆者による IPA 転写である。また以下表中では交替のタイプについて使役派生を C、逆使役派生を A、両極派生を E、補充を S、自他同形を L で表す。表 2 では逆使役派生をやや薄い灰色、両極派生と補充と自他同形を同色のやや濃い灰色で色付けしてある。

用いた辞書の表記に則り、表中に提示した動詞は全て不定形である。各語ごとに可能な限り交替に関わる形態素境界を示し、グロスを語彙の直下に併記した⁴。

表 2. 竹内 (2020) によるカバルド語の自他動詞対

Has. Verbs	Transitive	Intransitive	Type
1 boil	ва-ва-н (гъэвэн) CAUS-STEM-INF	ва-н (вэн) STEM-INF	C
2 freeze	ва-этэ-н (гъэщтын) CAUS-STEM-INF	этэ-н (щтын) STEM-INF	C
3 dry	ва-вэ-н (гъэгъун) CAUS-STEM-INF	вэ-н (гъун) STEM-INF	C
4 wake up	q'a-ва-вэ-н (къэгъэушын) DIR-CAUS-STEM-INF	вэ-н (ушын) STEM-INF	C
5 go out/put out	ва-вэ-н (гъэуныфын) CAUS-STEM-INF	вэ-н (уныфын) STEM-INF	C
6 sink	е'-ја-ва-лафа-н (щегъэлыэфэн) DIR-BPS-CAUS-STEM-INF	е'-ја-лафа-н (щилыэфэн) DIR-DIR-STEM-INF	E
7 learn/teach	ја-ва-дза-н (егъэджен) BPS-CAUS-STEM-INF	ја-дза-н (еджен) BPS-STEM-INF	C
8 melt	ва-тк'вэ-н (гъэтк'ун) CAUS-STEM-INF	тк'вэ-н (тк'ун) STEM-INF	C
	ва-вэ-н (гъэвын) CAUS-STEM-INF	вэ-н (вын) STEM-INF	C
9 stop	ва-вэ-н (гъэувыэн) CAUS-STEM-INF	вэ-н (увыэн) STEM-INF	C
10 turn	ваза-н (гъэзэн) STEM-INF	зэ-ваза-н (зыгъэзэн) REFL-STEM-INF	A
11 dissolve	ха-ва-тк'вэ-н (хэгъэтк'ухын) DIR-CAUS-STEM-INF	ха-тк'вэ-н (хэтк'ухын) DIR-STEM-INF	C
	ха-ва-фэ-н (хэгъэшыпсыхын) DIR-CAUS-STEM-INF	ха-фэ-н (хэшыпсыхын) DIR-STEM-INF	C

⁴ なお、語幹部分のグロスには意味ではなく単に STEM と表記した。これは一部の語について当該箇所が語根と呼べるかが不透明であり、また Bichoev (2008) を参照した結果当該箇所が単独で意味をなさない可能性もあったためである。交替に関わる範囲ではないため、分析には差し支えない。

12 burn	ka-sə-n (гъэсын) CAUS-STEM-INF	sə-n (сын) STEM-INF	C
13 destroy	q'a-wa-n (къэгъэуэн) DIR-CAUS-STEM-INF	q'a-wa-n (къэуэн) DIR-STEM-INF	C
14 fill	jəz-Ø e'ə-n (из щынын) STEM-IDF STEM-INF	jəz-Ø χwə-n (из хьун) STEM-IDF STEM-INF	E
15 finish	wəxə-n (ухын) STEM-INF	jə-wəxə-n (иухын) DIR-STEM-INF	A
16 begin	e'a-dza-n (щидзэн) DIR-STEM-INF	e'-jə-dza-n (щидзэн) DIR-DIR-STEM-INF	A
17 spread	wəbkwə-n (убгъун) STEM-INF	zə-wəbkwə-n (зыубгъун) REFL-STEM-INF	A
18 roll	ka-za-n (гъэжэн) CAUS-STEM-INF	za-n (жэн) STEM-INF	C
19 develop	z-ja-ka-wəzə-n (зегъэужьын) REFL-BPS-CAUS-STEM-INF	zə-wəzə-n (зыужьын) REFL-STEM-INF	C
20 get lost/lose	ka-k ^w 'adə-n (гъэкълудын) CAUS-STEM-INF	k ^w 'adə-n (кълудын) STEM-INF	C
21 rise/raise	ʔatə-n (Iэтын) STEM-INF	zə-ʔatə-n (зыIэтын) REFL-STEM-INF	A
22 improve	ja-ka-f'ak ^w 'a-n (егъэфIэклун) BPS-CAUS-STEM-INF	ja-f'ak ^w 'a-n (efIэклун) BPS-STEM-INF	C
23 rock	e'a-wpski' ^ʔ a-n (щIэупскIэн) DIR-STEM-INF	e'-jə-wpski' ^ʔ a-n (щIиупскIэн) DIR-DIR-STEM-INF	A
24 connect	zapəe'a-n (зэпыщIэн) STEM-INF	zapəe'a-n (зэпыщIэн) STEM-INF	L
25 change	χ ^w 'azə-n (хьуэжьын) STEM-INF	zə-χ ^w 'azə-n (зыхьуэжьын) REFL-STEM-INF	A
26 gather	zah ^w 'ahasə-n (зэхуэхьэсын) STEM-INF	zah ^w 'ahas-a: χwə-n (зэхуэхьэса хьун) STEM-PRET STEM-INF	A
27 open	ʔ ^w xə-n (Iухын) STEM-INF	za-ʔ ^w xə-n (зэIухын) REFL-STEM-INF	A
	tjəxə-n (техын) STEM-INF	za-tjəxə-n (зэтехын) REFL-STEM-INF	A
28 break	q'wəta-n (къутэн) STEM-INF	q'wəta-n (къутэн) STEM-INF	L
29 close	zah ^w 'ae'ə-n (зэхуэщIын) STEM-INF	zah ^w 'ae'-a: χwə-n (зэхуэщIа хьун) STEM-PRET STEM-INF	A
30 split	za-ɣ ^w 'a-ka-ki' ^ʔ a-n (зэгугъэжьын) REFL-DIR-CAUS-STEM-INF	za-ɣ ^w 'a-ki' ^ʔ a-n (зэгужьын) REFL-DIR-STEM-INF	C
	za-ɣ ^w 'a-ka-zə-n (зэгугъэзын) STEM-INF	za-ɣ ^w 'a-zə-n (зэгужьын) STEM-INF	C

	REFL-DIR-CAUS-STEM-INF	REFL-DIR-STEM-INF	
31 die/kill	wəkʰə-n (укълн) STEM-INF	fʰa-n (ллән) STEM-INF	S

また、以下に挙げる表 3 はタイプの比率である。A/C は逆使役派生と使役派生の比を示す。また、%n-d は全体に対する非方向性派生の比率を示す。

表 3. カバルド語のタイプ

A : 10/31 ≈ 32.3%	C : 16/31 ≈ 51.6%	E : 2/31 ≈ 6.5%	L : 2/31 ≈ 6.5%	S : 1/31 ≈ 3.2%	A/C : 10/16 ≈ 0.63	%n-d : 5/31 ≈ 0.16
-------------------	-------------------	-----------------	-----------------	-----------------	--------------------	--------------------

4.3. 個別的な追加分析

4.3.1. 有方向性の交替について

有方向性の基本的な派生形式については 3.1 節で述べた通りである。特筆すべきは 10 番‘turn’、30 番‘split’と迂言的な交替である。

10 番‘turn’/kaza-n/については、一見使役接頭辞/ka-/が/*za-n/という語根に接続して/*ka-za-n/となっているようだが、Bichoev (2008) においてはこの語根は確認することができなかつたため、語根/kaza-n/に再帰接頭辞である/za-/が接続して自動詞が派生されたと考えた。実際、Kumaxov (1989: 219) に以下のような記述がある。

В адыгских языках каузативный приф. гъз- в ряде случаев отошел к основе, став ее составной частью в силу утраты былой членимости производного глагола: (具体例のため中略) адыг, каб. гъзэз-н ‘повернуть, поворачивать’ и др. [場合によってはチェルケス語派の言語の使役接頭辞/ka-/は、かつてあった派生元の動詞の喪失によって、その動詞と複合した形で新たな語根となりうる。(中略) アディゲ語、カバルド語における‘回す (turn)’/kaza-n/ 等々。]

Kumaxov (1989: 219) 和訳は筆者による

これは 10 番の動詞が現在は再解釈を経て語根/kaza-n/となっていることを示唆しており、派生の方向が共時的には逆使役派生であるとするのが妥当である。

30 番‘split’に関してはやや複雑な形式であり、再帰接頭辞/za-/と同形と思しき構造を含んでいるため使役派生でないという分析も可能である。近接する語に使役派生が無いことも、30 番が使役派生でない可能性を支持する。しかし、どちらについても 10 番‘turn’と同様に再帰接頭辞/za-/が自動詞の語幹の一部となっていると考えられる。Bichoev (2008) では/*gʷa-zə-n/は確認できず、また/gʷa-kʰə-n/は動詞対とするにはやや乖離した意味‘отойти, отходить’ (井桁(2003) によ

れば‘傍へ寄る、離れる、退く、逸脱する’等)を持つため不相当とした。⁵

迂言的な交替である 26 番‘gather’と 29 番‘close’においては、自動詞がより統語的に複雑なため逆使役派生とした。

4.3.2. 非方向性の交替について

両極派生は 6 番‘sink’と 14 番‘fill’のみであり、先述の通り使役接頭辞/ka-/と方向接頭辞/ja-/による形態的な交替と、‘do’/e’an/と ‘become’/ɣwən/が自他を決定する迂言的な交替である。

6 番‘sink’は、他動詞が一見形態的に自動詞よりも複雑であることや、他動詞を派生するのに積極的に用いられる使役接頭辞/ka-/が含まれることから使役派生に見えるが、Bichoev (2008) には他動詞の/e’-ja-ka-lafa-n/は‘втаскивать’/e’a-lafa-n/ (井桁 (2003) によれば‘引きずり入れる’など)の使役形であるとの記載がある。したがって、この動詞対に関しては共通の形式/e’a-lafa-n/からの両極派生であると結論付けた。

また、6 番‘sink’と 19 番‘develop’については、補充とすべきかどうかという議論がある。これらの動詞対は他動詞においてのみ Bipersonal の接頭辞/ja-/を持つ。この接頭辞は通時的には動詞の人称接頭辞が語によっては義務的となったものであり、Matasović (2009: 38) は既に語幹の一部であるとしている。もし共時的に/ja-/を含めての語根であるとするならば、これらの交替は両極派生や使役派生ではなく異なる語根による補充であるとの解釈も可能である。しかし、今回はその解釈を採用せず、これらの交替はそれぞれ両極派生と使役派生であるとした。仮に接頭辞/ja-/の共時的な文法的役割が母語話者にとって分析不可能であり、語幹の一部として認識されたとしても、より基本的単位である/lafa-n/と接頭辞/ja-/との間に使役接頭辞が挿入されることを考慮すると、形態的には分析可能である。これは前段落でも触れた Bichoev (2008) における/e’-ja-ka-lafa-n/が/e’a-lafa-n/の使役形であるとの記載も踏まえれば妥当である。

唯一の補充である 31 番‘die/kill’に関しては、今回の調査で得られたものとは別に Matasović (2008: 70) に両極派生の動詞対と考えられる‘kill’/ʔə-n/と‘die’/ʔa-n/が挙げられている。しかし、他動詞の/ʔə-n/は Bichoev (2008) ではロシア語訳が‘задушить’ (井桁 (2003) によれば‘絞殺する、窒息させる’等)と記述されており、英語の‘kill’には対応しない。したがってこの動詞対は採用しなかった。

5. カバルド語自他交替に見られる類像性と形態論的相関

この章では、前章に挙げたデータの観察から得られる、カバルド語の自他交替の傾向について述べる。5.1 節ではカバルド語の有方向性交替の類像性について述べ、5.2 節では形態論的豊かさや自他交替の傾向の相関について述べる。

⁵ /gʷa-/に関して、表 2 中のグロスでは Matasović (2009) に従って方向接頭辞としたが、これは 3.1 節で提示した方向接頭辞と再帰接頭辞の位置関係と矛盾しているように見える。このことから 30 番‘split’の分析が他の動詞対に比べてやや不透明性を有していることが示唆される。

5.1. 有方向性交替の類像性

先述のように、4.2 節の表 2 で提示した 31 対の自他動詞対の順番は、Haspelmath (1993) にて提示される通言語的な傾向と同様のものである。通言語的に番号が小さくなるにつれて使役派生になる傾向があり、番号が大きくなるにつれて逆使役派生になる傾向があるというように並べられている。

カバルド語においては全体的な傾向として有方向性の交替、すなわち使役派生もしくは逆使役派生が多く、31 対の内 84%を占めている。この有方向性交替の内、使役派生と逆使役派生の分布は大まかに 14 番‘fill’を境に分かれており、14 番‘fill’よりも番号の小さいものは使役派生が優勢、14 番‘fill’より番号の大きなものは逆使役派生が優勢である。これは Haspelmath (1993) における自他交替に存在する類像性の主張を支持する結果である。

5.2. 形態論的豊かさと派生形式の相関

調査結果において自他同形と補充は少なく、24 番、28 番、31 番と疎らに存在するのみになっている。Haspelmath (1993: 102) において、英語に非常に自他同形が多い原因として英語の形態論的な乏しさがある可能性を取り上げられているが、カバルド語における自他同形と補充の少なさはこの仮説に加えて、「形態論的豊かさが自他同形と補充以外の交替をカバルド語において主たるものにしていく」という仮説を与えうるのではないか。

使役派生、逆使役派生、両極派生の交替は他動詞もしくは自動詞のどちらか、あるいは共通の語根に対して形態論的ないしは統語論的な操作を加える交替の形式である。これを「操作的交替」、そして特に操作のない自他同形と補充を「非操作的交替」というカテゴリに分ける。このとき前段落に述べた 2 つの並行する仮説をまとめたものが「言語の形態論的豊かさと交替が操作的である傾向があるかどうかには相関があり、ある言語が形態論的に豊かであればあるほど、その言語では操作的交替が多く、また形態論的に乏しいほど、非操作的交替が多い傾向にある」という主張である。カバルド語の場合は、形態論的豊かさの一つの尺度である統合性が影響的と考えられる。

カバルド語において動詞が統合的であるように、ある言語において形態論的操作の手段が豊富であれば、そのような言語で自動詞と他動詞を区別するにあたって形態素を用いて派生することは、形態論的に乏しい言語よりも相対的にコストが低い。仮に専用の形態素がないとしても、カバルド語の有方向性交替を担う接頭辞のように、一つの形態素に自他交替を含む複数の機能を担わせることもできる。補充のように全く異なる語根を用いることは、生産的な形態素を用いるよりもコストが高い。自他同形のように派生せずに一つの語形に自動詞と他動詞の意味を担わせ、構文のような形態論的操作よりも言語的単位の大きな手段で区別することもまたコストが高い。WATP にデータのある言語の中でも、自他同形と補充が両方とも無い 5 つの言語であるインドネシア語、サハ語、ウズベク語、トルコ語、アイヌ語が全て統合的であることもこの仮説を支持する。

形態論的操作の手段に乏しい場合、自他交替のために形態素による派生のような形態論的操

作を用いることは、統合的な言語より相対的にコストが高い。したがって前段落とは反対に、操作的交替はコストが高く、非操作的交替はコストが低い。北京語 (全体に占める操作的交替の割合が 4.2%)、タイ語 (非操作的交替のみ) などの孤立語はこの仮説を支持する。

他方で、統合的なアヴァル語において非操作的交替が 71%と多いことや、孤立語とされるベトナムにおいて迂言的な操作的交替が多いことから、この仮説が大まかな傾向に過ぎないこともまた示唆される。しかしながら自他交替が形式の問題である以上、その類型にどのような影響が存在するかという点において、形態論的な観点は無視できるものではない。

Haspelmath (1993) と WATP においては逆使役派生と使役派生の比並びに全体に対する非方向性交替の割合に注目している。それらに加えて操作的交替と非操作的交替の比を観察することによって、自他交替における形態論的な影響も計ることができるのではないか。

6. 他言語との対照から見られるカバルド語自他交替の地理的相関

本章では調査結果を地理的、もしくは系統的に近い言語の WATP におけるデータとの対照を通して典型的に考察する。6.1 節では個々の動詞対に関して対照し、6.2 節ではタイプ割合を対照する。それぞれを総合した結果として、コーカサスの諸言語を次の 4 グループに分類し、系統的な関係よりも地理的な位置関係の影響が自他交替の類型には強く現れる傾向にあるとする。そのグループとはすなわち①ロシア語 ②アヴァル語 ③カバルド語・ツェズ語・バツビ語・レズギ語・アゼルバイジャン語 ④グルジア語・アルメニア語である。

6.1. 個々の動詞対に関する比較

本節では、まず個々の動詞対について、WATP にデータの挙がっている全ての言語を総合した中で最も頻度の高い交替形式とカバルド語とを対照し、それらが一致しない動詞対について特に北コーカサス諸語やコーカサス諸言語の観点から傾向の見て取れるものに注目する。次に、全言語中最も割合の高い交替には合致するものの、北コーカサス諸語やコーカサス諸言語の観点から特徴的なものに注目する。なお、北コーカサス諸語とはカバルド語、アヴァル語、ツェズ語、バツビ語、レズギ語である。コーカサス諸言語とは北コーカサス諸語にロシア語、グルジア語、アルメニア語、アゼルバイジャン語を加えたものである。

下に示す表 4 は上から順に WATP に掲載されている全言語の内最も割合の高いもの、今回調査したカバルド語、以下 WATP より、山田 (2014) によるアヴァル語 (北東コーカサス語族)、コムリー (2014) によるツェズ語 (北東コーカサス語族)、児島 (2014) によるバツビ語 (北東コーカサス語族)、ハスペルマート (1993) によるレズギ語 (北東コーカサス語族)、児島 (2014) によるグルジア語 (カルトヴェリ語族)、ハスペルマート (1993) によるアルメニア語 (インドヨーロッパ語族)、吉村 (2014) によるアゼルバイジャン語 (チュルク諸語)、ハスペルマート (1993) によるロシア語 (インドヨーロッパ語族) のデータである。なお、○は自他の内片方しかデータがないスロットであり、その他のタイプについては表 2 同様に色付けしてある。

表 4. コーカサス周辺の言語との比較

N	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	
*	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	A	C	C	L	A	C	C	C	C	C	C	A	A	A	A	A	A	A	A	S
K	C	C	C	C	C	E	C	C	C	A	C	C	C	E	A	A	A	C	C	C	A	C	A	L	A	A	A	L	A	C	S	
A v	C	C	C	C	L	S	L	C	L	L	L	L	L	L	L	L	L	L	C	C	L	C	L	L	L	L	L	L	L	L	S	
T	C	C	C	E	C	E	S	C	C	C	C	C	E	C	C	E	C	C	E	C	C	E	C	O	E	E	A	C	A	A	C	
B	C	C	C	A	C	C	C	C	C	C	C	C	C	A	A	A	C	O	C	C	A	C	S	A	A	A	A	A	A	C	S	
L	L	C	C	E	C	E	A	C	C	C	C	L	C	C	A	A	C	E	E	C	A	E	A	C	E	A	A	L	A	L	L	
G	C	A	C	E	C	A	C	C	E	C	A	A	E	E	E	E	A	C	E	A	A	E	E	E	E	A	A	E	S	A	E	S
A r	C	E	C	C	E	A	C	A	C	A	A	A	A	E	C	A	A	A	C	E	C	C	A	A	A	A	E	A	A	A	S	
A z	C	C	C	E	C	C	E	C	C	A	C	C	A	C	C	C	A	A	C	C	E	C	A	C	A	A	A	A	A	A	C	
R	E	E	E	S	E	E	A	A	A	A	A	S	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	S	

カバルド語が通言語的傾向と異なっている部分は 11 か所あるが、中でも特筆すべきはコーカサス諸言語にて似た振る舞いを見せる 24 番‘connect’、28 番‘break’、北コーカサス諸語において似た振る舞いを見せる 6 番‘sink’、13 番‘destroy’、15 番‘finish’、16 番‘begin’、コーカサス諸言語の内で北コーカサス諸語以外のものと似た振る舞いを見せる 10 番‘tum’、14 番‘fill’の 8 か所である。

24 番‘connect’と 28 番‘break’の自他同形について、コーカサス諸言語に注目すると、どちらの場合にも言語は違うものの補充を提示する言語が存在することに加え、レズギ語の自他同形の 5 例にも 28 番が含まれ、またツェズ語がこの動詞について片方が空白のデータを提供している。いずれの動詞対においても自他同形と補充は通言語的に最も少ない交替である。グルジア語の両極派生も含め、厳密な交替の形式こそ異なるが、コーカサスにおける非方向性交替の傾向を示す。

6 番‘sink’、13 番‘destroy’、15 番‘finish’、16 番‘begin’は、北コーカサス諸語の内のみでそれぞれ似たような振る舞いを見せる。特に 13 番‘destroy’、15 番‘finish’、16 番‘begin’について、バツビ語とレズギ語に類似しており、15 番‘finish’から逆使役派生の交替が増えることは注目すべきである。北コーカサス諸語に系統的關係がある可能性を考慮すると、これらが系統的影響か地理的影響かは判然としないものの、ロシア語において 6 番まで非方向性派生が連続する点と、アルメニア語においても 16 番‘begin’から逆使役派生が連続し始める点を加えれば、地理的影響を支持しうる。

10 番‘tum’と 14 番‘fill’について、前者はアルメニア語とアゼルバイジャン語、後者はグルジア語とアルメニア語と同様の交替である。通言語的に優勢なものではなく、まして北コーカサス諸語においては同様の交替が無いにも拘らず、コーカサス諸言語の中でも北コーカサス諸語

以外の系統的関係の無いとされる言語と類似する交替を見せている。これらはこの小節の中で注目したコーカサスの特徴の中でも、最も地理的影響を支持する例である。

一方で、4番‘wake up’についてはコーカサス諸言語において両極派生が優勢であるが、カバルド語は通言語的に優勢な使役派生である。これは地理的影響が存在したとしても、通言語的な傾向の方が強いことを示す例である。

ここまでの対照をまとめると、語族は異なれど、コーカサス諸言語全体として弱い地理的影響は存在するであろうこと、また中でも北コーカサス諸語に注目すればコーカサス諸言語全体としてみたときよりも強い影響が示唆される。北コーカサス諸語は系統的関係の可能性が指摘されているため、これだけでは系統的影響か地理的影響かは妥当性を判断しかねるが、北コーカサス諸語以外と類似した交替が存在することと、北東コーカサス語族に属するにも拘らずアヴァル語に関しては他の言語と全く異なる分布を見せることから、地理的影響を支持するものとした。

6.2. タイプ割合に関する比較

次に、31対の動詞対に対する全体的な傾向を観察する。表5は表4に示された言語のタイプ割合である。

表 5. コーカサス周辺の言語のタイプ

Language	A	C	E	L	S	A/C	%n-d
K	32.3%	51.6%	6.5%	6.5%	3.2%	0.63	16.1%
Av	0%	29%	0%	64.5%	6.5%	0.02	71%
T	10%	60%	26.7%	0%	3.3%	0.17	30%
B	33.3%	60%	0%	0%	6.7%	0.55	6.7%
L	25.8%	38.7%	19.4%	16.1%	0%	0.67	35.5%
G	33.9%	22.6%	37.1%	0%	6.5%	1.5	43.5%
Ar	51.6%	27.4%	17.7%	0%	3.2%	1.88	21%
Az	31.2%	57.5%	9.7%	1.6%	0%	0.54	11.3%
R	74.2%	0%	16.1%	0%	9.7%	148.4	25.8%

使役派生の数によれば、カバルド語・ツェズ語・バツビ語・アゼルバイジャン語とグルジア語・アルメニア語がそれぞれ非常に近く、分布も類似している。逆使役派生の数はロシア語が突出して多く、カバルド語・バツビ語・レズギ語・アゼルバイジャン語とグルジア語・アルメニア語がそれぞれ類似している。両極派生の分布はロシア語・ツェズ語・レズギ語・グルジア語・アルメニア語がやや類似している。自他同形と補充に関しては特筆すべき共通点は観察

できない。A/C のみに着目しても、やはりグルジア語とアルメニア語がやや数値が大きく、またロシア語は突出して大きい。

前節の分析も踏まえ、大まかには次の4グループがそれぞれグループ内で類似しているといえる。すなわち①ロシア語 ②アヴァル語 ③カバルド語・ツェズ語・バツビ語・レズギ語・アゼルバイジャン語④グルジア語・アルメニア語である。図2は図1の中から本研究において取り扱った言語のみをプロットし、グループによって色分けしたものである。ロシア語、アヴァル語はやや例外的に見えるが、図2中央を北西から南東にかけて走るコーカサス山脈を横切る形で南西から北東という地理的尺度において観察すれば、やはり系統的な関係よりも地理的な位置関係の影響が自他交替の類型には現れる傾向にあると言える。コーカサス山脈という地理的特性を考慮すると、山脈に沿う形でグループ②が存在していることは、自他交替への地理的影響という観点において非常に示唆的である。

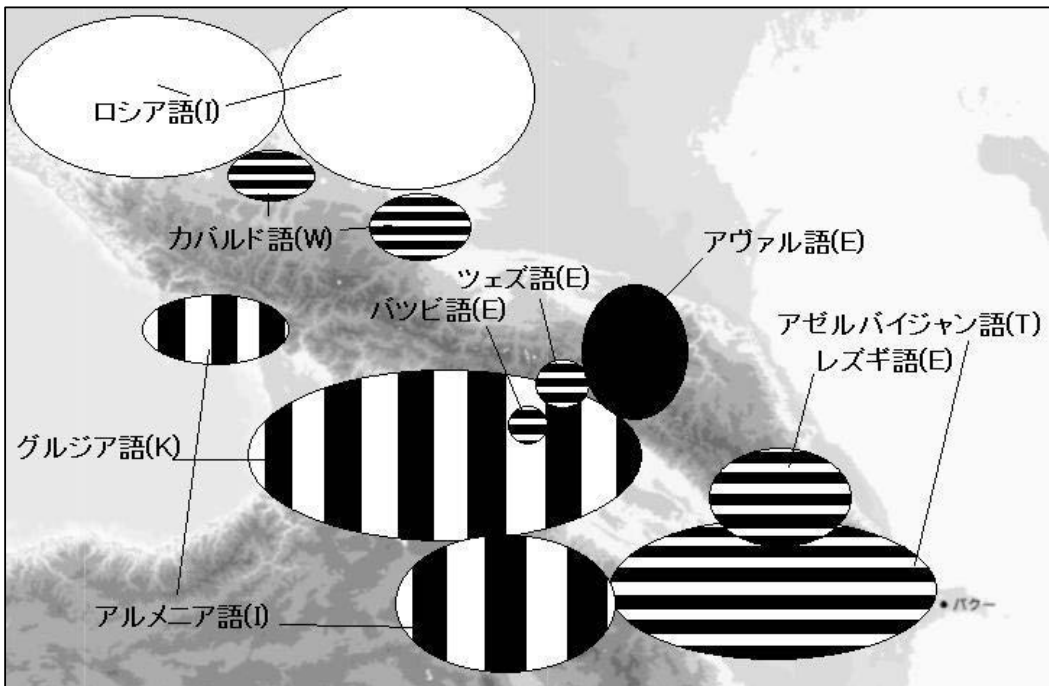


図 2. グループごとの色分け: ①は白塗、②は黒塗、③は横格子、④は縦格子で示されている。(地理院地図を基に筆者が作成した)

7. 結論

本稿では標準カバルド語における Haspelmath (1993) の自他動詞対を記述し、以下の3点を提示した。一点目に標準カバルド語の自他動詞対のデータは Haspelmath (1993) の「自他交替には意味による類像性が存在する」という主張を支持するということ、二点目に自他交替の派生形式の選択には、形態論的豊かさも関与する可能性があること、三点目に標準カバルド語の自他動詞対のデータは Haspelmath (1993) の「自他交替には系統的關係よりも地理的關係の影響が出

やすい」という示唆を支持することである。

略語集

AF: affirmative BPS: bipersonal CAUS: causative DEF: definite DIR: directional ERG: ergative FUT: future
IDF: indefinite INF: infinitive NOM: nominative PL: plural POT: potential PRET: preterite REFL: reflexive
SG: singular STEM: stem 1: first person 2: second person 3: third person

参考文献

- 安達真弓 (2014) 「ベトナム語使役交替動詞対データ」『使役交替言語地図』国立国語研究所。
(<http://watp.ninjal.ac.jp>) [2020年7月アクセス]
- Anjad M. J. and Michel, M. (2009) *Parlons Tcherkesse: Dialecte Kabarde*. Paris: L'Harmattan.
- Andrews, A. D. (2007) The major functions of the noun phrase. In: Timothy Shopen (eds.) *Language Typology and Syntactic Description*, vol. 1: *Clause Structure*, 132-223. Second edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bichoev, A. T. (2008) *Kabardino-Cherkessko-Russkij slovar' : Okolo 27000 slov*. Nal'chik: Izdatel'stvo E'l'brus.
- Bichoev, A. T. (2013) *Uchebnij Russko-Kabardino-Cherkesskij slovar' : Okolo 24000 slov*. Nal'chik: Izdatel'stvo E'l'brus.
- ブガエワ、アンナ (2014) 「アイヌ語使役交替動詞対データ」『使役交替言語地図』国立国語研究所。 (<http://watp.ninjal.ac.jp>) [2020年7月アクセス]
- Catford, J.C. (1974) *Ergativity in Caucasian Languages*. Washington, D.C.: ERIC Clearinghouse.
- Colarusso, J. (1992) *A grammar of the Kabardian language*. Calgary: University of Calgary Press.
- Colarusso, J. (2006) *Kabardian (East Circassian)*. München: Lincom Europa.
- コムリー、バーナード (2014) 「ツェズ語使役交替動詞対データ」『使役交替言語地図』国立国語研究所。 (<http://watp.ninjal.ac.jp>) [2020年7月アクセス]
- ディリック、セバル・新田志穂・栗林裕 (2014) 「トルコ語使役交替動詞対データ」『使役交替言語地図』国立国語研究所。 (<http://watp.ninjal.ac.jp>) [2020年7月アクセス]
- 江畑冬生 (2014) 「サハ語使役交替動詞対データ」『使役交替言語地図』国立国語研究所。
(<http://watp.ninjal.ac.jp>) [2020年7月アクセス]
- Haspelmith, M. (1993) More on the typology of inchoative/causative verb alternations. In: Comrie, M. and Polinsky, M. (eds.) *Causatives and Transitivity*, 87-120. Amsterdam: John Benjamins.
- ハスペルマート、マルティン (1993) 「アルメニア語使役交替動詞対データ」『使役交替言語地図』国立国語研究所。 (<http://watp.ninjal.ac.jp>) [2020年7月アクセス]
- ハスペルマート、マルティン (1993) 「インドネシア語使役交替動詞対データ」『使役交替言語地図』国立国語研究所。 (<http://watp.ninjal.ac.jp>) [2020年7月アクセス]
- ハスペルマート、マルティン (1993) 「レズギ語使役交替動詞対データ」『使役交替言語地図』

- 国立国語研究所. (<http://watp.ninjal.ac.jp>) [2020年7月アクセス]
- ハスペルマート、マルティン (1993) 「ロシア語使役交替動詞対データ」『使役交替言語地図』国立国語研究所. (<http://watp.ninjal.ac.jp>) [2020年7月アクセス]
- Howlett, C. (1996) *The Concise Oxford Russian dictionary*. Oxford: Oxford University Press.
- 井桁貞義 (2003) 『コンサイス露和辞典第5版』東京:三省堂.
- Klimov, G.A. (1994) *Einführung in die kaukasische Sprachwissenschaft*. Hamburg: H. Buske.
- 国立国語研究所 (2014) 『使役交替言語地図』 (<http://watp.ninjal.ac.jp>) [2020年7月アクセス]
- 児島康宏 (2014) 「グルジア語使役交替動詞対データ」『使役交替言語地図』国立国語研究所. (<http://watp.ninjal.ac.jp>) [2020年7月アクセス]
- 児島康宏 (2014) 「バツビ語使役交替動詞対データ」『使役交替言語地図』国立国語研究所. (<http://watp.ninjal.ac.jp>) [2020年7月アクセス]
- Kuipers, A.H. (1975) *A Dictionary of ProtoCircassian Roots*. Lisse: Peter De Ridder.
- Kumaxov, M. A. (1989) *Sravnitel'no-istoricheskaja grammatika adygskikh (cherkesskikh) jazykov*. Moskva: Nauka.
- Kumaxov, M. A., Vamling, K. and Kumakhova, Z. (1996) Ergative case in the Circassian languages. In: *Working Papers*, 45: 93-111. Lund University, Dept. of Linguistics.
- Kumaxov, M. A. (2006) *Kabardino-Cherkesskij jazyk*. Nal'chik: Izdatel'skij centr E'l'-Fa.
- Lander, Y. and Daniel, M. (2011) The Caucasian languages. In: Van Der Auwera, J. and Kortmann, B. (eds.), *The Languages and Linguistics of Europe: A Comprehensive Guide. (The World of Linguistics. Vol. 1.)*, 125-157. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Matasović, R. (2008) Transitivity in Kabardian. In: Robert D. and Van Valin Jr. (eds.) *Investigations of the Syntax–Semantics–Pragmatics Interface*, 59–74. Amsterdam: John Benjamins.
- Matasović, R. (2009) *A Short Grammar of Kabardian* (eighth version). Zagreb: University of Zagreb.
- Nikolaev, S. L. and Sergej, A. S. (1994) *A North Caucasian Etymological Dictionary*. Moscow: Asterisk.
- 大塚行誠 (2014) 「ティディム・チン語使役交替動詞対データ」『使役交替言語地図』国立国語研究所. (<http://watp.ninjal.ac.jp>) [2020年7月アクセス]
- 沈力 (2014) 「北京語使役交替動詞対データ」『使役交替言語地図』国立国語研究所. (<http://watp.ninjal.ac.jp>) [2020年7月アクセス]
- Shogentsukov, A. O. (1955) *Russko-Kabardinsko-Cherkesskij slovar' : okolo 30000 slov*. Moskva: Gosudarstvennoe izd-vo inostrannykh i natsional'nykh slovarj.
- 高橋清子 (2014) 「タイ語使役交替動詞対データ」『使役交替言語地図』国立国語研究所. (<http://watp.ninjal.ac.jp>) [2020年7月アクセス]
- 竹内晶 (2020) 「カバルド語使役交替動詞対データ」『使役交替言語地図』国立国語研究所. (<http://watp.ninjal.ac.jp>) [2020年7月アクセス]
- 山田久就 (2014) 「アヴァル語使役交替動詞対データ」『使役交替言語地図』国立国語研究所. (<http://watp.ninjal.ac.jp>) [2020年7月アクセス]

吉村大樹 (2014) 「アゼルバイジャン語使役交替動詞対データ」『使役交替言語地図』国立国語研究所. (<http://watp.ninjal.ac.jp>) [2020年7月アクセス]

吉村大樹 (2014) 「ウズベク語使役交替動詞対データ」『使役交替言語地図』国立国語研究所. (<http://watp.ninjal.ac.jp>) [2020年7月アクセス]

国土地理院「地理院地図(電子国土 Web)」

<<https://maps.gsi.go.jp/#6/42.244785/44.912109/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1>> [2020年7月アクセス]

Causal–Noncausal Verb Pairs in Standard Kabardian

Sho Takeuchi

shotakeuchiattuo@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

Keywords: Northwest Caucasian family, Kabardian, verb alternation, typology

Abstract

This paper describes the Standard Kabardian causal–noncausal verb alternation from the typological viewpoint presented in Haspelmath (1993). To be more specific, it is shown (i) Standard Kabardian prefers directed alternation; (ii) the Standard Kabardian pattern of causative and anticausative alternation matches that of the cross-linguistic one stated in Haspelmath (1993); and (iii) the selection of alternation types in Standard Kabardian as a whole is rather similar to those of Northeast Caucasian languages (except for Avar) and Azerbaijani. With the observation noted above, I claim the following three points. First, the data of verb alternation in Standard Kabardian support Haspelmath’s (1993) claim that there exists a semantic iconicity in the verb alternation pattern. Second, the selection of alternation types may be affected by the morphological richness of the language. Third, the data of verb alternation in Standard Kabardian support Haspelmath’s (1993) claim that the geographical relationship has a stronger influence over the transitivity verb alternation typology than genetic relationship of languages.

(たけうち・しょう 東京大学)